



マアジ (対馬暖流系群) ①

マアジは日本周辺に広く生息しており、本系群はこのうち東シナ海～日本海に分布する群である。

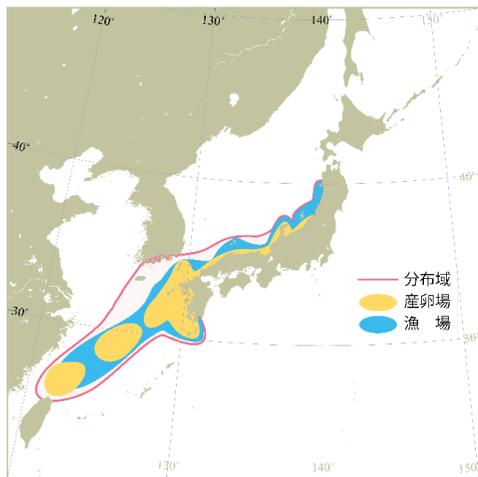


図1 分布域

東シナ海南部から日本海北部沿岸域まで広く分布する。

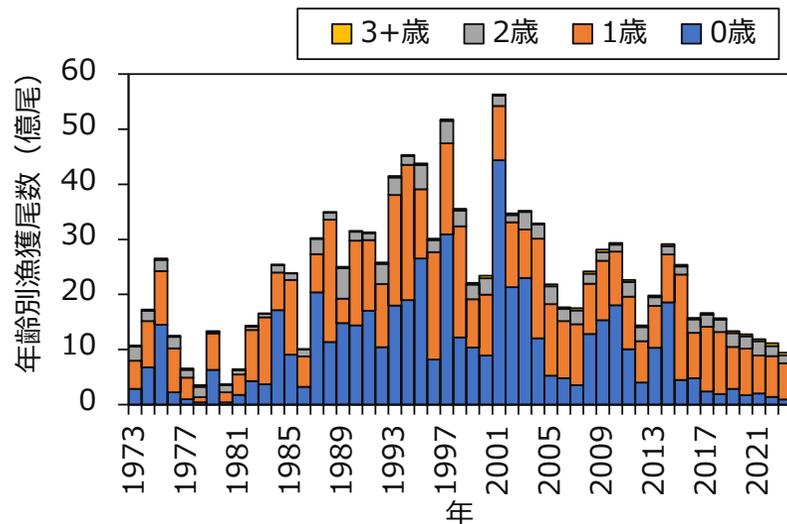
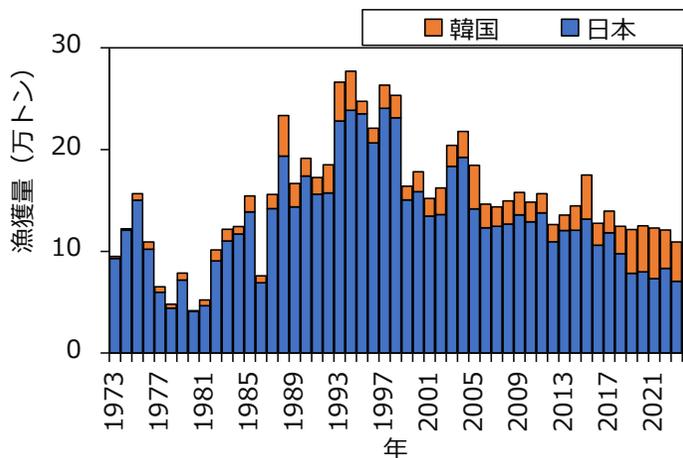


図2 漁獲量の推移



日本と韓国を合わせた漁獲量は、1980～1990年代に増加し、1988、1993～1998年には20万トンを超えた。その後、減少傾向を示したが、2006年以降はほぼ横ばいで、2023年は10.9万トンであった。そのうち日本は7.1万トン、韓国は3.9万トンであった。

図3 年齢別漁獲尾数の推移

漁獲物の年齢組成を尾数で見ると、0歳（青）、1歳（オレンジ）を中心に構成されており、2歳魚以上が占める割合は少ない。

マアジ (対馬暖流系群) ②

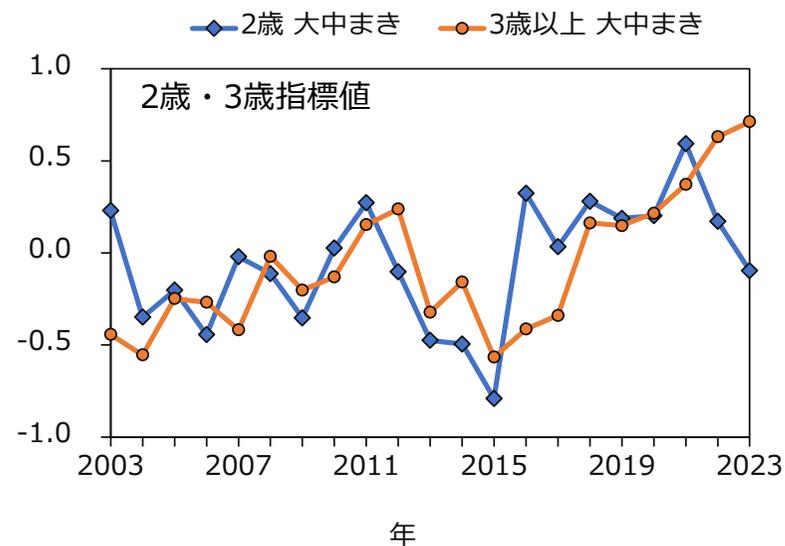
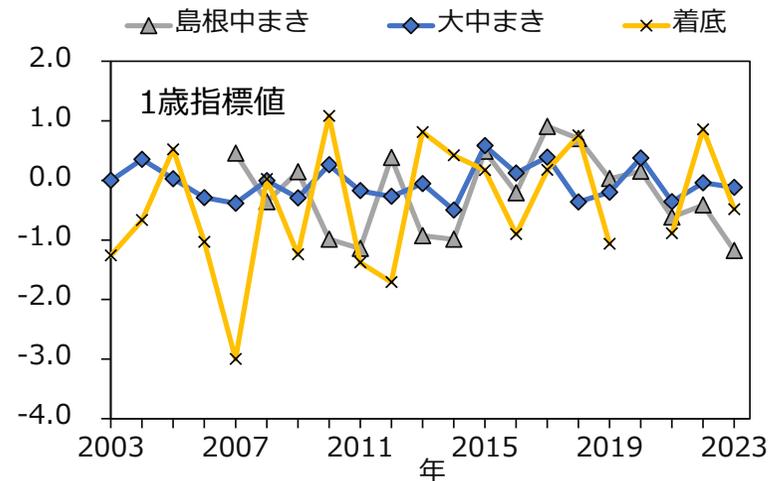
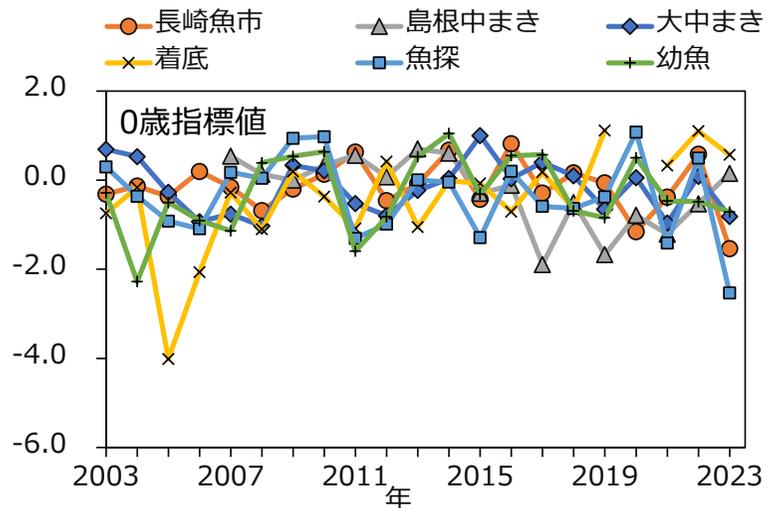


図4 年齢別資源量指標値の推移

年齢別資源量指標値には調査船調査の結果や漁況（CPUE）を反映した値を用いた（各指標値は平均値で規格化した後、対数をとって示した）。2023年は3歳魚以上の指標値以外は前年と比較して減少しているものが多かった。

マアジ (対馬暖流系群) ③

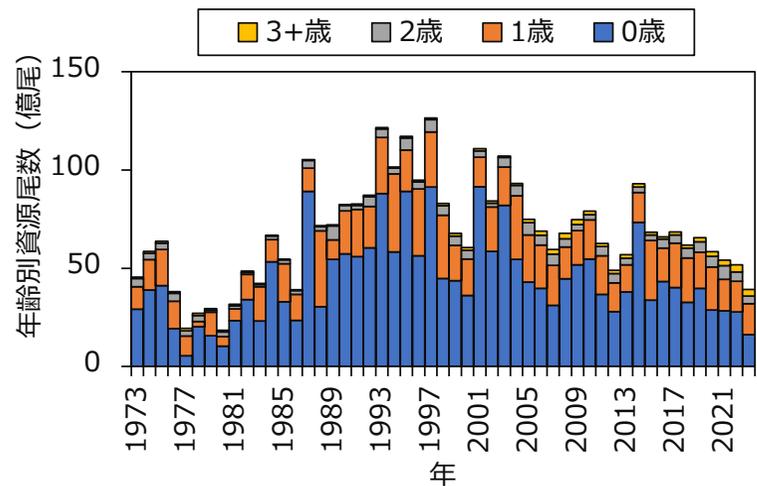
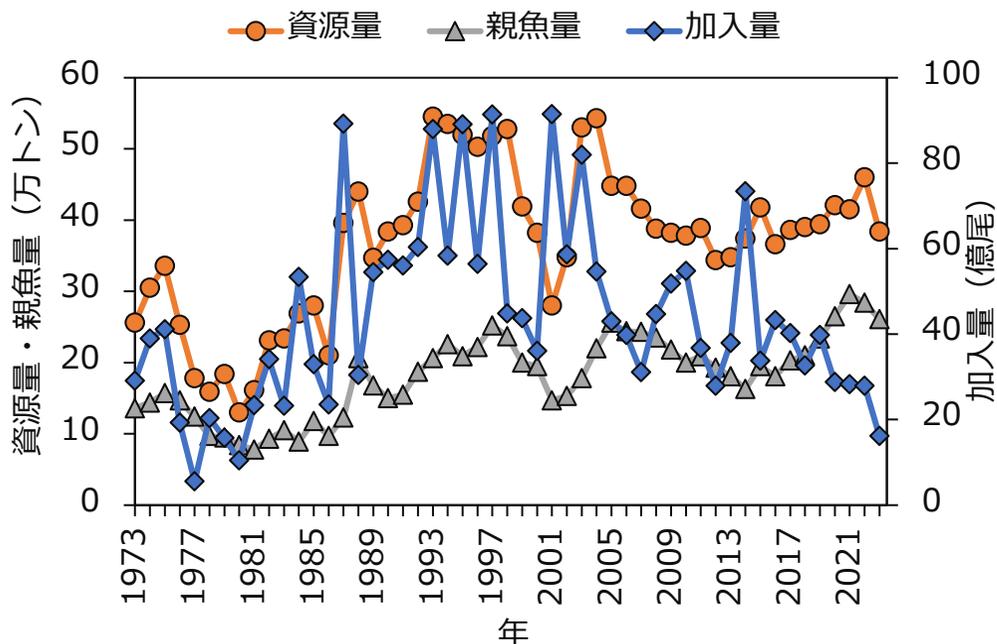


図5 資源量・親魚量・加入量

資源量は2013～2022年は34.7万～46.0万トンの範囲で推移し、2023年は38.4万トンであった。加入量（0歳魚の資源尾数）は2020年以降、30億尾を下回り、低い水準にあると推定された。親魚量は直近5年間（2019～2023年）でみると横ばい傾向で、2023年には26.1万トンであった。

図6 年齢別資源尾数

0歳魚と1歳魚の占める割合が高い。近年では、2014年に0歳魚尾数が多かったが、2015年以降の0歳魚尾数は16億～43億尾で推移した。

マアジ (対馬暖流系群) ④

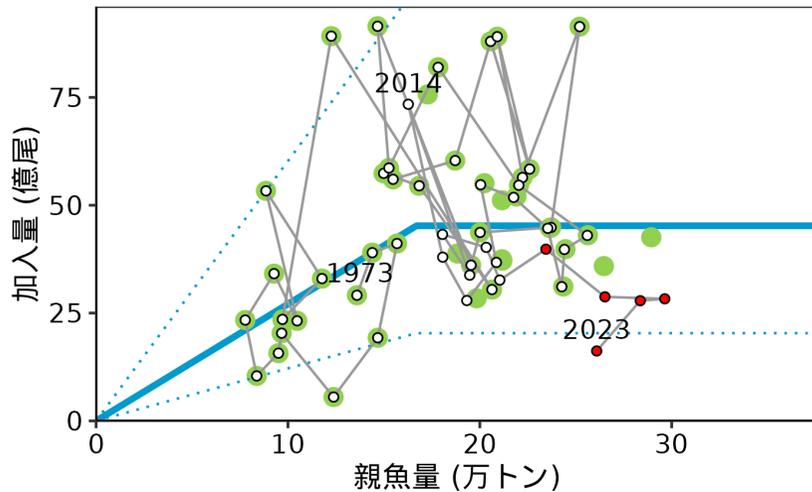


図7 再生産関係

1973～2017年の親魚量と加入量に対し、ホッケースティック型再生産関係（青太線）を適用した。図中の青点線は、再生産関係の下で実際の親魚量と加入量の90%が含まれると推定される範囲である。

緑丸は再生産関係を推定した時の観測値、白丸は2024年度資源評価で更新された観測値である。なお、赤丸は直近5年の観測値である。

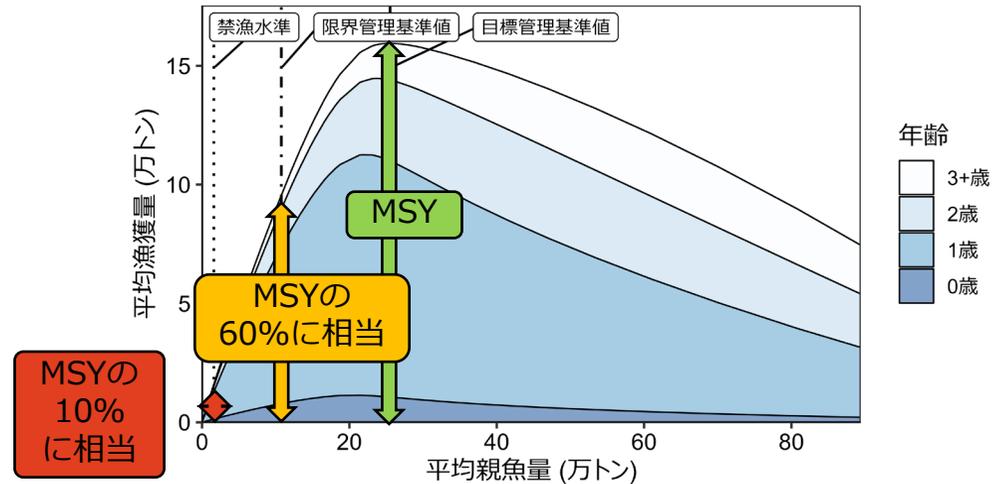


図8 管理基準値と禁漁水準

最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）は25.4万トンと算定される。目標管理基準値はSBmsy、限界管理基準値はMSYの60%の漁獲量が得られる親魚量、禁漁水準はMSYの10%の漁獲量が得られる親魚量である。

目標管理基準値	限界管理基準値	禁漁水準	2023年の親魚量	MSY	2023年の漁獲量
25.4万トン	10.7万トン	1.6万トン	26.1万トン	15.8万トン	10.9万トン

マアジ (対馬暖流系群) ⑤

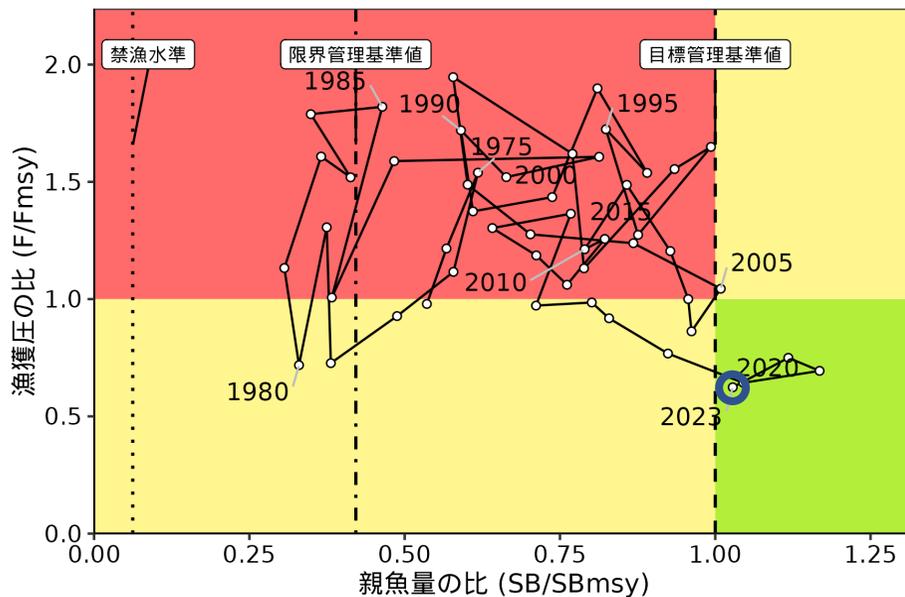


図9 神戸プロット (神戸チャート)

2020～2023年の親魚量 (SB) は、最大持続生産量 (MSY) を実現する親魚量 (SBmsy) を上回っている。漁獲圧 (F) は、2016年以降、SBmsy を維持する漁獲圧 (Fmsy) を下回っている。

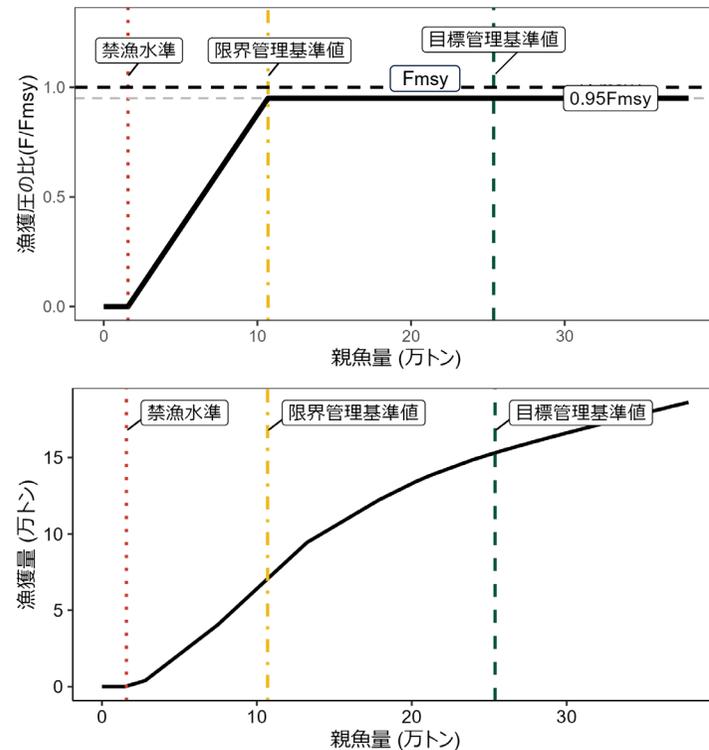
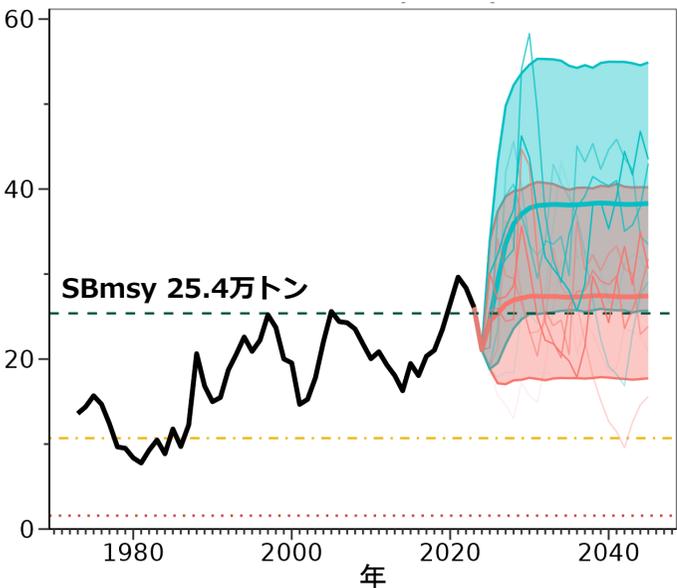


図10 漁獲管理規則 (上図：縦軸は漁獲圧、下図：縦軸は漁獲量)

Fmsyに乘じる調整係数である β を0.95とした場合の漁獲管理規則を黒い太線で示す。下図の漁獲量については、平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。

マアジ (対馬暖流系群) ⑥

将来の親魚量 (万トン)



将来の漁獲量 (万トン)

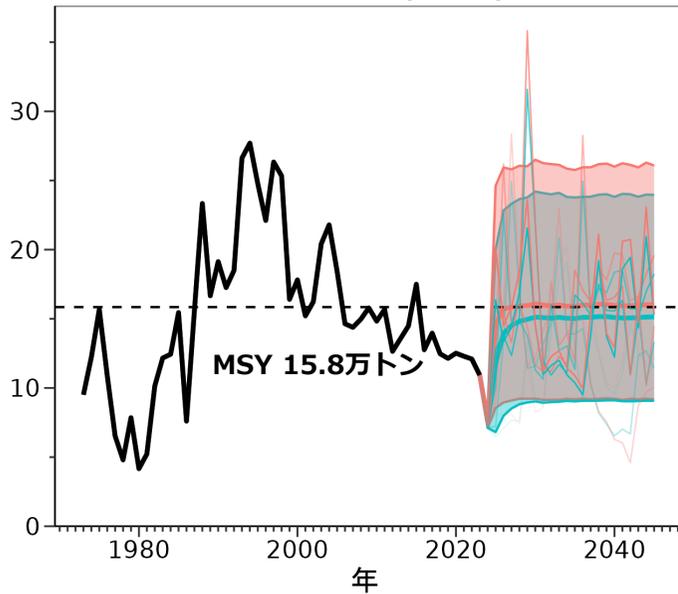


図11 漁獲シナリオの下での親魚量と漁獲量の将来予測 (現状の漁獲圧は参考)

βを0.95とした場合の漁獲管理規則に基づく将来予測結果を示す。

β=0.95とする漁獲管理規則での漁獲を継続することにより、平均値としては親魚量はSBmsyを上回った後、漁獲量はMSY水準に達した後、ともに横ばいで推移する。

- 漁獲シナリオに基づく将来予測 (β=0.95)
- 現状の漁獲圧に基づく将来予測

実線は予測結果の平均値を、網掛けは予測結果(1万回のシミュレーションを試行)の90%が含まれる範囲を示す。

- MSY
- 目標管理基準値
- 限界管理基準値
- 禁漁水準

マアジ（対馬暖流系群）⑦

表1. 将来の平均親魚量（万トン）

2031年に親魚量が目標管理基準値（25.4万トン）を上回る確率

β	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	
1.0	21.1		24.7	25.3	25.5	25.6	25.8	25.7	46%
0.95			25.4	26.5	27.0	27.2	27.4	27.4	57%
0.9		24.5	26.1	27.7	28.5	28.8	29.1	29.2	66%
0.8			27.6	30.4	31.9	32.6	33.1	33.2	84%
現状の漁獲圧			29.2	33.6	35.9	37.0	37.8	38.1	95%

表2. 将来の平均漁獲量（万トン）

β	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031
1.0	7.6	15.1	16.0	16.0	16.0	16.0	16.1	16.0
0.95		14.6	15.7	15.8	15.9	16.0	16.1	16.0
0.9		14.1	15.4	15.6	15.8	15.8	16.0	15.9
0.8		13.0	14.8	15.1	15.4	15.5	15.6	15.6
現状の漁獲圧		11.8	13.9	14.5	14.8	15.0	15.1	15.1

漁獲シナリオに基づき漁獲した場合の平均親魚量と平均漁獲量の将来予測を示す。漁獲シナリオでは、 β に0.95を用いた漁獲管理規則で漁獲を行う（赤枠）。2024年の漁獲量は、予測される資源量と現状の漁獲圧（2021～2023年の平均： $\beta=0.70$ 相当）により仮定した。

この漁獲シナリオに従うと、2025年の平均漁獲量は14.6万トン、2031年に親魚量が目標管理基準値を上回る確率は57%と予測される。併せて、 β を0.8～1.0の範囲で変更させた場合と現状の漁獲圧を続けた場合の将来予測結果も示した。

表3. ABC要約表

2025年のABC （万トン）	2025年の親魚量予測平均値 （万トン）	現状の漁獲圧に対する比 （F/F2021-2023）	2025年の漁獲割合 （%）
14.6	24.5	1.35	31

※ 表の値は今後の資源評価により更新される。

マアジ (対馬暖流系群)

— 2022年度評価
— 2023年度評価
— 2024年度評価

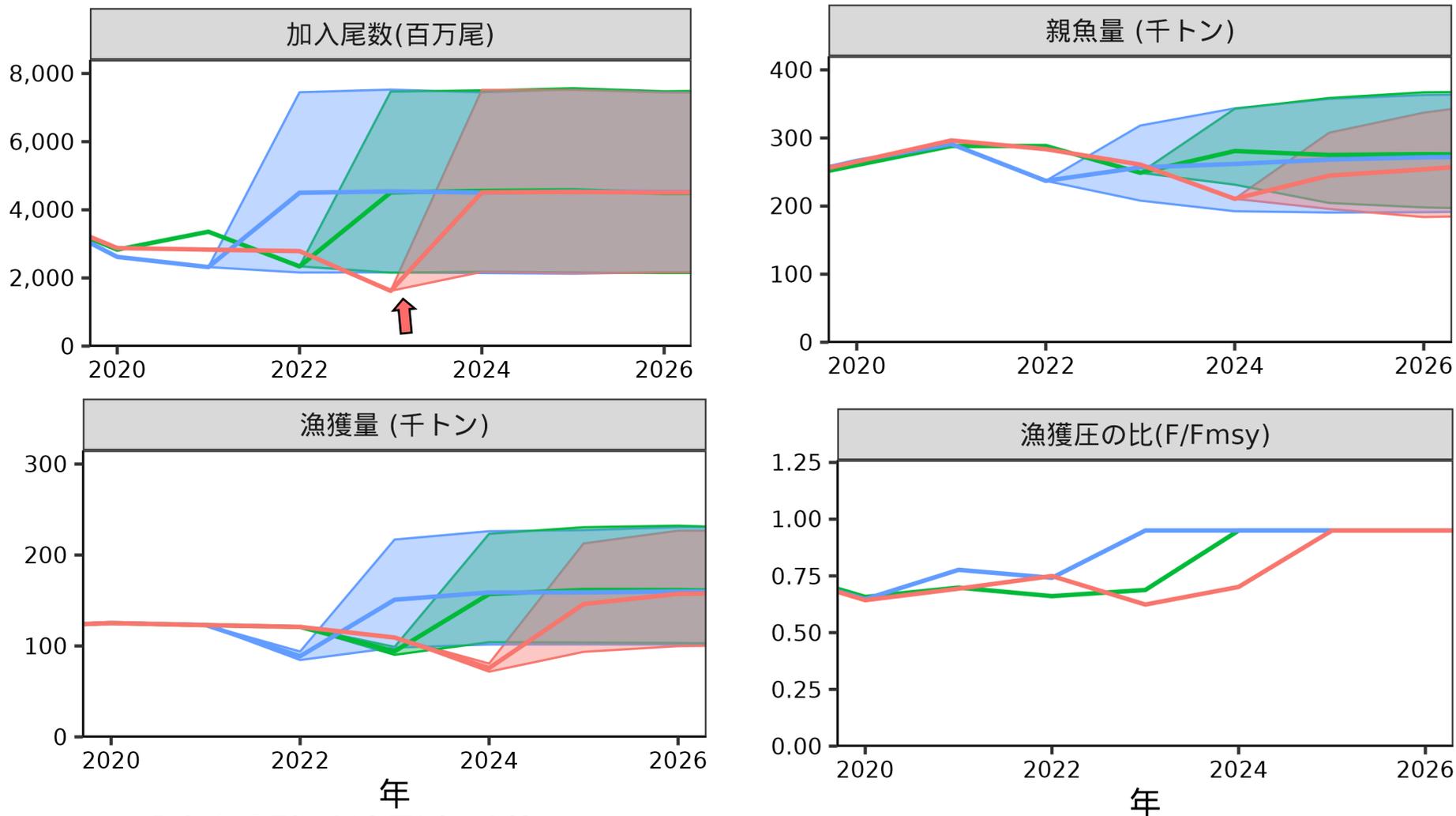


図12. 評価年度別の将来予測の比較

実線は予測結果の平均値、網掛けは90%が含まれる範囲。

- 2023年加入量は想定している範囲を下回った。

マアジ（対馬暖流系群）

表4. 各年の評価年度別の加入量（百万尾）

評価年度 \ 年	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年
2022	2,318	4,499	4,540		
2023	3,357	2,339	4,509	4,555	
2024	2,831	2,787	1,621	4,512	4,524

表5. 各年の評価年度別の親魚量（千トン）

評価年度 \ 年	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年
2022	291	237	257		
2023	288	288	249	281	
2024	296	284	261	211	245

表6. 各年の評価年度別の漁獲量（千トン）

評価年度 \ 年	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年
2022	123	89	151		
2023	123	121	94	157	
2024	123	121	109	76	146

表7. 各年の評価年度別の漁獲圧の比（F/Fmsy）

評価年度 \ 年	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年
2022	0.78	0.74	0.95		
2023	0.70	0.66	0.69	0.95	
2024	0.69	0.75	0.62	0.70	0.95

赤色の数字は当該評価年度のABC算定年の予測値を示す。

青色の数字は当該評価年度の評価年の仮定値を示す。

黒色の数字は次評価年度以降の推定値を示す。